sky blood 目録 1

蝉蛾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｓｋｙ ｂｌｏｏｄ 目録１

【Ｎコード】
Ｎ２８４５Ｚ

【作者名】
蝉蛾

【あらすじ】
“ラズウェル”と名乗る謎のテロ組織によって、壊滅させられた東京。その手段は元ＫＧＢ将校から奪った生物兵器であった。
画一化を図り、統合していく暴力組織。崩壊していく地方の都市機能。
そんな日本で繰り広げられる陰謀劇。

目録１（前書き）

初投稿です。温かい目でどうか見てください。自分でもこの小説のジャンルは何なのだろうと非常に悩んでおります。

目録1

発生

――――東京。
全国各地のテレビに唐突に現れた景色はソレだった。
朝の天気予報時の前フリでもおなじみの東京の俯瞰風景。
ヘリで撮られたと思われる東京タワーを中心としたビル街。
何も変わらない、いつもの風景だった。
ただ、不可解な事象が二つ。
――――まず一つ。全国所構わず各地にその風景が現れたこと。
アニメを見ていた家庭から、映画の再放送をみていた家庭まで、その風景に置き換わったことだ。
放送事故かーーーーこの時点ではテレビの前でくだを巻いていた連中はそう判断したであろう。
――――そして、
その風景には足りないものがあった。
その風景の下を這いずり回る黒。
――――ようするに人だ。
天気予報の時に、まばらにだが見えるであろう。天気予報を報じる女子アナウンサーの嘘くさい笑顔と共に垂れ流されるヘリから見た東京の風景。
その中にあったであろう、道路を歩く人の存在がいなくなっていたのだ。
――――だが。
――――だが、ただ人がいない、というだけなら大して違和感もなくこの映像を見ることが出来ただろう。
――――が、
二つ目の異常が、一つ目の異常を嫌にでも意識させる。

――――その人が這いずり回っているはずの道路は全部ドス黒かった。
その黒は、
――――知れたこと。血が変色し、黒くなってしまったモノたち。
それが道路を染め上げている原因だと理解すると、全国で断続的に悲鳴が巻き起こる。
この風景内の人間全員が赤い血だまりに浮かんだ肉塊と化していることは決定事項だった。
が、それを理解できない連中はというと、
混乱していた。
理解が出来なかった。
ありえない。
だってそうだろう？架空の世界のお話を垂れ流す際にも流血沙汰はテレビじゃ抑えられている。演出だろうが何だろうがマスゴミ世界の中であろうとも血はＮＧだ。
だがーーーー
それが演出であるとかいうバカげた夢は強制的に覚まされることになる。
画面が切り替わる。
「こんにちは！」
出てきたのはどこぞのスプラッター映画よろしくーーーーというか明らかにそれを狙ったであろうホッケーマスクをかぶった男が、信じられないほど生理的嫌悪を促すダニ声を全国ネットで撒き散らしていた。
「どうですかどうですかどうですかどうですかぁぁぁぁぁぁぁぁ！いやぁすばらしいでしょうすばらしいでしょう。もうやばいっす俺ホントにテンションあがってきたぜーーーーーーーーーーーーぇぇぇぇぇ！」
切り替え切り替え切り替え。ダニ声をバックグラウンドミュージックに画面が２秒ごとに切り替わる。

――――ネズミに食い荒らされる地下鉄の人間の死体。
――――蜂の巣状と化したロシア人。
――――血だまりと死体まみれの渋谷。
形容する言葉は血の池地獄絵図。
「どーーーですかぁ！ぎゃはははははは！さっきちょろっと出てきやがったロシア人のジジイがいただろう？あのジジイの置き土産だよ東京をこんなにしたのはさぁ。
このジジイがさ、旧ソ連で開発していた生物兵器を占有していてな！こっちが有効活用してやったのさ。元チェーカー崩れだったみたいでな、粛清対象にまで上がっていたらしいがこれのおかげで助かっていたみたいだ」
そういうと、凶暴な笑みの中に皮肉気な冷笑の色も含めながら叫ぶ。
「凄いよなぁ、あの国。本当に尊敬するよ。チェルノブイリ然り今回然り。なんつうか史上最強の功利主義国だよねあそこ。あのアンクル・サムでさえ、他国の人間の命だったら平気で換金できるけど、自国民の首に不発弾仕掛けてでも利益をとることはしないよ。いや、マジで凄いよ」
さて、と言った。
声音が変わった。
透き通るかのような澄んだ女の声に変わる。
画像はホッケーマスクのまま。
「――――我々はここ、東京を僭越ながら占拠させていただいております。
そして、ここーーーー東京をアップグレードする技術も手に入れました」
恭しくそう切り出した女の声は、まだ続く。
「ここを軍隊を使って取り返そうなどと思われないほうがよろしいかと思われますが――――――――――
――――五臓六腑が激しくシェイクされる感覚を味わいたいならそれもよろしいかと。

我々のことならご心配なさらないで下さい。
ワクチンは我々の手ですでに開発済みで御座いますゆえーーーーーーーーーーーーーーーーーー」
さて、と言い。
「我々は確たる目的はありますが、日本を占拠しようなどという野望を持っているわけではありません。ただ、東京は我々の最終目標の道具にすぎないのですから」
そしてーーーー
最後は、幾重にも声が重なった無機質な声で幕が閉じる。
――――日本終焉への。
「僭越ながら最後に、我々の組織、いえ我々が創られた際の名称というより――――――――――――――――――――そうですね、商品名といったほうが分かりやすいですか。それは――――――――――――」
一度咳払いをし、その商品名を答えた。
「ラズウェル。賀北会後期不浄人連盟ラズウェルです。よろしくお願いいたします」

ザイール＝アルマージ視点より　暴力監視協会員との邂逅

なんだってんだ。俺の人生
わが祖国のケチのつき始めは無論偉そうに大陸でふんぞり返っているアメリカという名の戦争と金儲けの違いも見い出すことが出来ないらしい腐りきった低俗主義者の屑共が、湾岸戦争終結時にわが祖

国に対し、軍を作らないよう強制しだしてからだ。自分は世界の警察を気取っているくせに全くふざけた話があったもんだ。
祖国の治安悪化を嘆く声が世界中にあるが、ここまでテロ組織が肥大化したのも、それを食い止める軍も警察もなくなったからだ。その上でそうして受けた“テロ”という結果から、国の意見も聞かず“これはテロとの戦争だ”と喚き散らす。テロとの戦争を題しているにもかかわらず何の罪もない民衆ごとすべてを焼き払った。いったいアメリカの地ででかいビルにふんぞり返っている死の商人共はこの“正義”のための戦争でどれだけ儲けたか分かったもんじゃない。
――――まあ、本当に現在テロ組織に捕えられている私がこんなことを思うのはアレだとは思うが。
そう。私は共にアッラーに忠誠を誓った同胞に捕えられているのだ。猿ぐつわと手錠までかけられて。
どうやら私が捕えられている理由は、アメリカの連中への態度を決めきれない政府の連中に発破をかけるためであろう。つまり私は人質で、奴らは交換条件に自分たちの行動に制限を設けるなとでも言うつもりだろう。
よって、この場所は誰にも知られてはならないだろうから、神経を尖らせ、絶対にばれない場所を選び、交渉を粛々と続けているだろう。だから、第三勢力によっての救出は、期待するだけ無駄であろう。
――――が。
だがここ10分ほど何かと騒がしい。
――――米軍の連中？
そう思ったが、違ったようだ。
外から連続した発砲音が聞こえ、重いものが倒れるドォ――――という音がこっちまで聞こえてきた。
そして、独房の扉を開いたのは。
――――5人一組の黒ずくめの男達だった。

黒のトレンチコートを着込み、Ｈ＆Ｋ　ＸＭ８アサルトライフルを持った彼らは無線に報告を入れる。
「マスター。人質の保護、終わりました」
彼らは機敏に、だが軍人特有の形式張った動きもなく、俺に話しかける。
「ザイール＝アルマージか？」
すでにその謎の集団には人質の存在も関知しているらしい。ならば米ではないだろう。あの美国人共が薄汚いアジアンの人質などそこらの虫ケラにも劣る命としか考えていないだろうから関知などしようともせずテロリストごと爆破して始末しているだろうからな。
「あんた方は？」
「国際戦線部隊エイミー・ソルジャーズ連盟特務会員倉峰遥斗直属部隊“灰狼衆”だ。長いよなあ」
エイミー・ソルジャーズ連盟！噂には聞いていたが実在したのか――――――――――――――――――――――――――――――――――――。
戦場での罰則規定である国際法。その法の執行部隊が出来上がったと噂には聞いていた。
だが、所詮すぐ潰されるものだと思っていたが、まさかまだ活動を続けていたとは。
この５人を見ればわかる。傭兵の趣を残していながらも行動に迷いもなく練度と統率力も特殊部隊にも引けを取らない。なるほど。世界の軍にケンカ売るだけのことはある。
そのまま俺を連れて俺が捕えられていた部屋がある場所の階段を駆け下りる。
そして、その５人のうち一人が駆け下りた階の砦の非常口の扉を蹴破ると、あとの４人が一斉に銃口を構える。
――――アホ面下げて突っ立ていた連中が蜂の巣になるのが２秒。
そこからさらにどうしたと喚きながら隣の部屋から飛び出てきた連中を手榴弾で火葬するのに１秒。敵がいなくなったのを確認して弾倉切り替えをするのに３秒。１０秒もかからない顛末だった。

ついさっきまで火葬場となっていた隣部屋に迷わず入ると、そこの鉄格子を外す。
「高度は――――――――――――13メートルといったところか。まあ、いけるだろう」
なんて声が聞こえてきた。一体何の話だ。
「おいあんた、おぶされ。ここから飛び降りる」
いつから軍人の仕事が映画のスタントマンの仕事に切り替わったのか説明してくれ、と叫びそうになっていた俺を無理やり担ぐ。
不摂生のせいでぶくぶくの脂肪の塊を持ち、90キロはある私の体を平気で担ぎ、高度13メートルからの飛び降りを実行した。
ダン！
飛び降りた衝撃をうまく地面に受け流したのだろう。地面が派手に割れているが、当の本人たちは平気な顔をしている。
――――だが。
「終わりだ。残念だがザイール君。君の命はアッラーの前に棺で捧げられることになる」
図られていたのだろう。絶妙なタイミングでテロリストの包囲は完成していた。
砦からの狙撃手もちらほら見える。
――――終わりか。ざっと目にしただけで数百人規模で包囲している。
だが黒ずくめはいまだ涼しい表情を崩していない。
「ザイールさん。
――――これから“灰狼衆”の代名詞、見せてやるよ」
そういうと、両手を上げる。
――――まあ、常識的に言えば、降服のサイン。
「結構だ。そりゃあここでドンパチやるより略式法作って頭ぶち抜かれる方がまだマシだろうよ」
「いや――――――――――――――――――――――――」
瞬間、

「アホ面さげて罠にかかったのは手前等だよ
ケツの底までできっちりな！。
――――鉄雨を降らせ！」
――――一帯には“雨”が降り注いだ。
それは全方位から黒ずくめだけを避けるように横殴りの雨を演出し、
それによって飛び散った血漿が辺り一面を紅色に変貌させる。
――――一瞬だった。
数百ものテロリストの命をこの２秒で、脳漿と共に吹き飛ばし薙ぎ倒し蹂躙した。
残っていたのは、一面の紅い紅い肉塊畑。
「これが、“灰狼衆”の誇る“鉄雨”。
アーマー着込んだ連中ならフルメタル弾の強雨に変わるし、車両相手なら５０口径弾の大粒の雨になる。
――――酷いものだね」
――――俺はただ愕然とするほかなかった。
そのまま無線に報告を入れる黒ずくめ。
「マスター。片が付きました」

倉峰遥斗視点より　結果報告。

最近のテロリストも質が落ちたかね。自分で鉄の暴風雨に突っ込んでくるとはな。ま、楽な仕事だったな。今回は。さて――――――と。
この仕事はとてもスムーズに終わった。人質も無事救出したうえにその組織に関係しているデータまで手に入ったので、特別ボーナスの期待を胸に報告すると俺はリーダーのクソ爺からまたとんでもない“仕事”を任されることとなった。
「日本に、行け、だぁ？」

俺は精一杯の侮蔑を込めてそう呟き、精一杯の不満を込めて、ジジイの耳にこう語りかける。“くたばれ”と。
「ライオス爺さん？一つ聞いてもいいか？俺は殉教者でもなければイカレてもいない。
ただの傭兵だ。何を好き好んであんなゴミの掃き溜めのクソ漁りにいかなきゃならない。
いつから暴力監視協会から慈善ボランティア団体に転職したのか、説明してくれないか」
その命令は地雷原に裸で突貫して自分の身を犠牲にして地雷処理を行え、という命令と全く同質のものだ。このジジイはそうまでしても自分がくたばる前に一人でも多くの天国への道連れが欲しいのであろうか。
「手前の耳は、間違いなく手前の言うクソの沈澱部位か、慈善家の安穏とした祈りの声でもつまりにつまって同類のゴミが含んだ情報しか入らないブタの耳にでもなってんだろうよ。よかったな。家畜でもブタはお前ほどうるさくはない」
――――糞ジジイ。耄碌しても舌先だけは衰えはしねえ。
今、俺と会話らしきことをしているこのくたばり損ないはライオス・ネミアースという名前だ。人生の大半を過ごした米軍での生活はこのジジイの偏屈さを増長させただけだったらしい。
このジジイはベトナム還りの名も無き敗残兵であり、アメリカという狂った戦争中毒国の被害者でもある。
――――このジジイの息子は親子共々ベトコンの山林部隊共と丁々発止の愉快な銃撃戦を繰り広げている途中で悪夢の薬剤、枯葉剤を撒き散らされ、血を吐いて出来の悪い喜劇役者の如く踊りながら死んでいった。
その喜劇のような悲劇を演出した息子を見たジジイの心中はまさに蛇蝎の如き祖国への憎悪に溢れていたであろう。
そして息子の死亡通知を見たジジイの妻はこれまた喜劇の如き顔芸を演出し、声にならぬ悲鳴を上げ、そのままハンマーを数秒か振り

回した後、手元が狂い自分の頭を砕いて死亡。最後は喜劇からコントに転換したようだ。
――――――生命保険会社もこの女の死因、“ハンマーの取り扱い中での事故”を受理するあたり意外と良心的であるらしい。
――――国益にもならぬ戦争の為に祖国の兵をも犠牲にしたアメリカという国に、このジジイは一体何を見、何を思ったのであろうか。
――――それから、3年後。
ジジイは民間軍事会社を買収したのち表向きそのままの民間軍事会社だが――――裏の顔は世界中の傭兵が加入している国際法刑罰執行連盟“エイミー・ソルジャーズ連盟”を設立したのである。
血と硝煙まみれる戦場という名の地獄にも一応の秩序を作り出すことを目的とした暴力監視協会。会員数15万人を超す最凶の傭兵組織。
ただの一兵卒に過ぎなかったこのジジイに、何故これだけの組織を作りだすことができたのかーーーーだれの知るところではない。
――――で、俺は。
「で、どこに糞が詰まってるってクソジジイ。手前は耳の通気口が程よいみたいだが肝心の記憶がすっからかんのまっさらなお脳じゃねえか。まるで脳のしわがそのままその顔面にお引越ししてきたみたいだな。
――――慈善活動以外の目的があるんならばさっさと吐きやがれ。まさかそのことまで忘れたわけではあるまいな。そうだとしたらこの連盟もおしまいだ」
「貴様は顔も脳もほんとまっさらきれいだよ
――――察しはついてるだろう、このクソガキ。のうのうと逃げようとしやがって。
――――今回も同じ“粛清任務”だ」
粛清。よく言ったもんだ。
やはり、このジジイにしても、“我こそが正義”とのたまっているアンクル・サムの遺伝子は、きっちりかっきり残っている。

「ああーーーやっぱり動いたのはあのイカレ集団か。で、あのテレビでおっかなびっくり蜂の巣になってたのはセルゲイのオヤジか。となると依頼者はーーーー」
「わかってると思うが、高山九山だ」
以外な人物だ。正直状況的にも倫理的にもあのイカレ集団の死亡通知に名を連ねているべきであろうに。
「あの防衛省のオヤジなんで生きてるの？東京在住人でしょあの武器マニア」
「おお、聞いて驚け。遂に霞ヶ関の日本のしみったれた官僚も、天下り先のおべっかに大阪指定暴力団にまで手を伸ばし始めたぞ。――――現役官僚が極道との武器取引だよ。堕ちるとこまで堕ちたな。更にその出張のおかげで命が助かったとあっては神様ってのがどれだけアバズレなのかが分かるぜ全く」
「あのおやじのバイタリティーにはいつも驚かされる――――けどな。おいジジイ。早く本題に入れ。今の日本に茶々入れる理由はなんだ。下らねえ理由だったらトーラス・レイジングブルの４４マグナムがあんたの頭にいい通気口を作ってくれるぜ。赤子の手ぐらいだったら軽くぶち抜ける位のやつを、だ」
そういうとさも不満そうに神経質っぽいしゃがれた声で、だが驚くほど大きな声で喚き散らす。まだくたばりそうもねえみたいだね、クソ野郎。
「おい――――クソ峰。お前は当事者だろう
奴等の“創造主”の身元調査の依頼を受けていたのは貴様の“灰狼衆”だっただろう。
――――データの一部を傍受した挙句に貴様今更逃げるつもりか！今更逃げられると思ってるのか、ええ！」
あーあーあーあーはいはいはいはい。その仕事を背景の説明も無しに頼んだのも手前だ。責任転嫁してんじゃねえよクソジジイ。そんな言葉を言いたかったがどうにかこらえる。ジジイの頭ってのは固いばかりか感情の表現方法が大声でがなる以外見つからない位おつ

むの出来が悪いのだ。言ったって無駄である。その耳障りな声をこの世から消去する方法はジジイがくたばるのを待つほかない。
先は長そうだ。
「耳元でがなるなクソジジイ。
――――アレはアレ、コレはコレだ。
わかってるよ、ライオス爺さん。これも通常任務には変わりねえ。ちゃんとやるさ。
――――だけどな、ちゃんと衣食住がそろった場所があるのかと聞いてるんだ。
嫌だぜおい。またベトナム戦争時よろしく山々巡っての野宿生活なんてよ」
「ああ、そっちはぬかりねぇ。てめえの受け入れ先はちゃあーんとある。
――――大阪の知事が恐ろしい切れ者でな、首都壊滅状態を利用して大阪をドブ攫いの町にしやがった。
そいつが設立した大阪治安維持団体、そこにお前は行ってもらう
――――その名は」
ライオスのジジイは声を震わせ言った。きっと笑ってるんだろう。
――――主にそんな怪しいところに行かされる俺の不幸を。
「サファオル。大阪治安維持団体サファオルだ」

ライオス＝ネミアース視点より　人物分析

倉峰遥斗。
この偏屈なクソガキをエイミー・ソルジャーズに招き入れたのは、その能力の高さは無論あったものの、それよりも本当にもの恐ろしい“眼”をしていたからだ。
――――むしろあの能力の高さはその“眼”によるものなのかも知れない。

奴が敵と向かい合う時、その眼に浮かんでいるのは相手への不安と死を煽る死神の眼だった。
――――その眼は、もう既に守るものなど何一つなく、自分の命の抵当価格すらつけていない、空虚な眼だ。
――――守るものがない、と簡単に言うがそれはどういう事なのか、想像してみるがいい。
――――祖国も持たず、ろくでもない環境に生まれ落ちた傭兵の人間ですら、自身の命を守るために硝煙と血漿飛び散る戦場に立っている。
――――だが、倉峰は自身の命にすら何ら価値を見出していない。自分の命にすら執着をなくしてしまった人間の末路なぞ破滅しかない。
――――そう、奴は破滅を願っているんだろう。
奴は今“偏屈で口が悪い仏頂面の凶暴者”という仮面を被れているが、民間軍事会社の一傭兵時代は感情というものが本当に死んでいた。
気だるげな眼と仏頂面を張り付けた黒衣の男。
その表情は死地にあろうと日常にあろうと変わらない。
だが、順応性は高かったようで、エイミー・ソルジャーズのコミュニティーで一番使いやすい仮面を見繕って、上手く被ったのだ。
――――奴は、いつかこの組織を離れるだろう。
これは勘でしかないが、確信に近い勘だと思っている。
――――そもそも奴が傭兵になったのはそこのコミュニティーが金でしか繋がっていない簡潔な関係であったからだ。
その中では仲間意識も信頼関係すらない。感情を交えなくても自身の居場所を創れる。そういった特異性のあるコミュニティーに魅力を感じたのであろう。
ならば、組織が長続きしそれぞれがそれぞれの領域を踏み込んだ付き合いをしようとしたときが――――奴はここから消え去る時だ。
――――奴は人との関係性を持つことを極端に恐れている。

――――同じような境遇の――――――例えば、灰狼衆の連中やカラニハル以外に奴と仲がいい奴を儂は知らない。連中もまた、他者との関係性を拒絶されてきた空虚な連中だったからだ。
だが、違いがあるとすればカラニハルや灰狼衆の連中は最初から人との関わり合いがなかった。だからカラニハルは新たな人間との絆を創れたのだろうが、
――――倉峰は、創った絆を自らの手で叩き壊してしまった、そう儂は予想している。
――――奴が傭兵業に足を踏み入れる二年前、
倉峰姓を持つ中年の死体が、京都の古アパートで見つかった。
死因は、他殺だった。
その一人息子は、それから行方不明だそうだ。

――――大阪。
日本において東京に次いで2位――――ということは今や1位の活気を持つ都市。
まあ、今やどの都市も首都壊滅のせいでやっていけなくなってもう瀕死なわけだが。
首都がなくなったことで地方は変革を求められたのだ。
これからの知事の戦いは、予算の分捕り争いではなく、地方自身で払われる税金でどれだけやりくりするかということが争点となっているのだ。
――――その戦いに勝利できたのは大阪だけだった。
公務員に払われる給料はほとんど首都から来ていたため、それが壊滅すると公務員は生きていけなくなる。

――――つまり、警官の給料は払われないということだ。
治安維持の暴力がない無法地帯と化した国がどのようになるか、想像に難くないと思う。
――――今日本は、犯罪組織が乱立する最悪の国となっている。
――――街にあふれかえっていたチンピラは粗悪品の銃を手に、略奪をおこなう集団と化し、
――――地方に散らばっていた暴力組織は画一化を図り次々と統合していく。
――――法の下、その番人として仕事をしてきた警官や、日本唯一の対外防衛暴力である
自衛隊ですら、一つの組織になり略奪を始める始末。
――――大阪は、そんな日本の中で唯一、事件前よりも活気を持つ都市となった。
――――大阪府知事、車谷謙三
元大阪指定暴力団木崎組四代組長であり、選挙の際、他のゼネコンに対し労働争議を引き起こさせ、違法収益、脱税を暴き、完全に潰し、その後――――
木崎組の下にいた2桁にも及ぶフロント企業の固定票を手に大阪知事まで駆け上った、狐の如く賢しい男である。
――――だが、手腕としては歴代最高といわれている男でもあり、ゼネコンの影響を受けずに当選したため、予算をせっせと土建屋に運ぶ必要もなく、その余剰分の予算を、“外国人街”の設立に使い、企業に大量の労働力を与え、競争力を高めた。
それに反対する労働勢力は、木坂組の手で潰していった。
――――そして、首都壊滅の事件後、
国際間は揺れ動き、そしてーーーーさらなる陰謀を働かせたのだった。
今、日本を支配してきた霞ヶ関の業突張りの豚どもはもういない。
ならばあの“ラズウェル”の化け物どもがいなくなれば、日本の金の吸引器であるその椅子に本国の人間が座れるかもしれないーーー

ーそんなことを各国の首脳どもは考えたのだろう。
そういった奴らが“犯罪組織の武力制圧”の名を借りて、日本の実効支配を目論んだーーーーが
その野望はことごとく失敗に終わった。
一番に乗り込んだアメリカのグリーンベレー共は、八つ裂きにされて、それを動画にとられてアメリカ政府にたたきつけやがった。
怒り狂った大統領が、もう一度“東京大空襲
“よろしく戦闘機での爆撃を実施したがーーーーバミューダトライアングルが如くぷっつりと無線が切れて忽然と爆撃機は消えたのだ
グリーンベレー虐殺動画は今度はＹｏｕｔｕｂｅ上に載せられ、さらに“もうこの生物兵器は製造工程に載せてますよ”という遠回しな脅迫も送られてきており、まともな監視すらできやしない状況なのだ。
――――で、各国が怖がって日本から監視の目が去ったことを利用して、
――――車谷は知恵を働かせ、こっちに天文学的な金が手に入る手段を思いついたのだ。
世界の警察を気取っているアメリカすら監視から手を引いている始末なのがこの国の現状――――そこで車谷は行動を起こす
――――各国の企業、暴力組織に“売り込み
“を行ったのだ。
そのセールストークはーーーー「大阪ドブ攫い業はじめました！」だった。
つまるところ資金洗浄、つまりマネーロンダリングだ。
企業ぐるみでの脱税で得た金、暴力組織の麻薬業で得た金、こうした表に出せない臭い金で日本の商品、つまりは、もはや販売量が一気に低下してしまった日本製ハイブリッド車や、数百単位が束になった高級腕時計や、グラビアアイドルの写真集まで幅広くドブ臭い金で交換を行おうということだ。
こうして、台湾からヨーロッパ、さらには韓国の暴力組織から企業

関係者まで集まる大都市となったのだ。
――――いま、日本製品は大阪でしか作れないので、需要が高まっている。よって、恐ろしく高値で売れるのだ。だから、大阪に来る方々はそれを買ってそのまま左から右へ横流しを行う。
――――大阪は企業が涙を流してこの怪しげな顧客に感謝をし、こういった外からの人たちは表に出せない汚い金をきれいさっぱり消去できる。
誰もがみんな幸せになれるシステムを作り上げ、そしてさらにその手腕ゆえに、大阪は今や事件前より活気を持つ都市と化したのだった。

・・・・・

レイナー・ハスウェルト視点より、とある偏屈な傭兵との会話

「と、いうわけだレイナー。理解できたか」
「ああよーく理解できたぜくそったれ。車谷ってのがどれだけの怪物かってことがな」
「ライオスのジジイもビックリしてたぜ。まさか首都壊滅をこう利用するとわな」
――――しみったれた国になったもんだな、日本。
クルーザーから見える瀬戸内海の建物は、サラエボの内戦地よろしく、砲撃と銃弾の痕跡が残ってないほうが少ない有様だった。
――――瀬戸内海では利権目的で中国軍が秘密裏に攻め込んできており、車谷が撃退したらしい、
――――が。
監視の目がないということはやはり厄介である。どんな薄汚い代物

を持ち込もうとも誰の目に留まることもないが、どれだけ潰したトマトよろしく、神から受け賜わりし鉄分とヘモグロビンの塊をまき散らそうとも掃除しようという素晴らしき面子に固められた善意を振り回す国家もいないのだ。
「ケツの穴がもう一つ増えることだけは勘弁願いたい。俺は傭兵であって、こんな陰謀合戦に巻き込まれる身分じゃあない」
「まったくだ。ライオスのジジイいつかホント反逆されないことを祈ってるよ」
「もう老い先短いんだ、そんなリスクみんな取らないよ」
――――まったく、こんな物騒な男を呼び出すあたり、今の日本がどれだけやばい状態かが見えてくる。
このとなりでブツブツ文句を垂れ流している男は、倉峰遥斗という。気だるげに細められている目と、目鼻立ちがそろった端正な顔、スラリとした肩までかかる薄闇色に染められた髪を持つこの少年がーーー米兵を恐怖のどん底にたたき落とした最悪の粛清人だとは思わないだろう。
エイミー・ソルジャーズ連盟特務会員であり
エイミー・ソルジャーズの誇る最強の遊撃隊である傭兵団“灰狼衆”頭目でもあるのだ
後方では遥か彼方鉄雨を降らし、前線に出れば統率された動きで効率よく死体の山を築きあげていく“遊撃隊”と情報収集、管理、潜入を行う“諜報隊”とに分かれた部隊。この傭兵団一小隊でアフガンのゲリラ隊のすべてを灰塵に帰すことができるとまで言われている怪物集団だ。
で、そんな剣呑な怪物を抱え込みたくなるほど、大阪は暴力を欲しがっているということになる。
それにーーーー呼んだ人間も人間だ。
元防衛省官僚、高山九山。
防衛省としてのコネと生まれ持っての交渉力を使い、官僚でありながら海外の武器の斡旋を車谷の親である木崎組にしていた人間だ。

官僚の安穏としたぬるま湯で生きることに一切魅力を感じきれず、そのような危険な交渉の場に人生の興奮を感じるようになった男。
――――まあ、暴力監視協会であるエイミーソルジャーズとは、特に敵対関係であるわけではないのだが、武器の密売商が、国際戦線部隊をよく呼ぶ気になったもんだ。
「さて――――――――――――――――――――――――見えて来たな。――――――――――――――――――――――ああ、くそったれだ。なんでこうも厄介事ばかりが集まるんだ俺の人生」
「どうした倉峰」
本州が徐々に見えてくると同時に、倉峰が毒づいた。
「見ろ見ろ。あそこは広島か。旧市街地でヒズボラのジハード宣言よろしくーーーー広島ビル街が火葬場になってやがる。
――――ほう、ありゃＲＰＧか。
あははははは。遂に日本も対戦車ロケットが当たり前のように持ち出される国になったか！」
笑ってはいるが、顔は憎悪に染まっている。
――――白シャツ金髪のチンピラが、何を思ったかＲＰＧ弾頭を弾ける笑顔でうってやがる。
倉峰はあははははと壊れた笑いをあげると怨嗟の声をあげだした。ライオス会長への。
「冗談じゃあねえぞくそったれ！あの耄碌ジジイ、ついに痴呆の進行に加わって、薬もやりだしたってか！“灰狼衆”全員ターミネーター仕様に出来上がっていて、一声上げるだけでどんな奇蹟も呼び起こせるとかいう幻覚まで見だしたのか！記憶が消えた脳に捏造された幻覚で埋まるようになったってんなら、もうおしまいだこの連盟！」
「ヤー。全く終わってるね――――――――――――――――――――――――――――――――――しかし
一目でわかる場末のチンピラが、粗悪品とはいえＲＰＧ持ってると

はね。素晴らしい。いつか個人で核兵器を持てる時代になるやもしれぬ」
――――全く非でえ話しがあったもんだ。
一昔前、ナイフを持つだけで目をキラキラさせ、さも自分が神のごとき力を持っているかのような幻想を抱いていたどーしようもないチンピラがいまやロケランもって大はしゃぎしているのだ。
――――つまり、それ程ここは武器取引盛んな地域になったということだ。いや、一因として絶対あの高山も噛んでいるのだが
「さて本州上陸っと」
そう倉峰が言い放つ。
――――が、そのときようやく状況が理解できた。
「――――――――――――――――――――レイナー。大阪行く前に一仕事だ
こいつらの除去をする」
そのチンピラが火葬していたのは、広島に移り住んでいた避難民だった。
――――エイミー・ソルジャーズの仕事にたった今切り替わったのだ。
倉峰が愛用の４０Ｓ＆Ｗ弾使用の自動拳銃ベレッタＭ８０００と、４４マグナム弾使用のリボルバー、トーラス・レイジングブルを抜き放つ。
「業腹ながら、仕事だ」その宣言ののち
旧広島には幾重もの悲鳴が連続的に木霊し、そして、静かになった。

・・・・・・・・

・・・・・

――――車谷視点より、とある二人組の傭兵との会合

――――来ましたか。
大阪府庁の知事室のデスクに横たわっていた私は体を起こす。
ノックの音に反応して。
「入ってください」
そう言って入ってきたのは、驚くほど若い男とーーーー鉄仮面を被った男だった。
若い男のほうは、整った顔立ちに仏頂面を張り付けている。それだけ見れば年相応の若者といった面立ちだが、気だるげに細められた目は濁りきっており、それはどこまでも果てない殺意を秘めた人間のそれだった。
鉄仮面の男は全く表情が読めないのは当たり前だが、目すらその鉄仮面に隠れて見えない
周りの景色が見えていないのは確実だろう。
二人とも黒ずくめのトレンチコートを着込んでおり、かなり目立つ服装をしているくせに一切の気配も感じられない。
それだけでこの二人が一級品の傭兵であることを一瞬で車谷は理解した。
「あなたが倉峰さんですか。九山に聞いた時から一度お会いしたかったのですよ」
「その高山はどこ行った。俺を呼び出した張本人だろう」
「あいつは今取引に行ってますよ。どうも大手の武器仲買企業と提携するつもりらしくて
四方八方情報を集めているところです。
――――さて本題に入りましょうか。

――――あのラズウェルの連中の“創造主”であるカルト宗教団体“賀北会”の盗聴、あなたがやったらしいですね」
「諜報といえ諜報と。ま、そうだよ」
「ぜひ教えてもらいたい。無論、タダとは言いません。こちらが持っている情報も差し上げます。
私らが聞きたいのは彼らの成り立ち。
それは隣のレイナー君が知っている情報ですね」
「ああ。そうだよ。あんたも抜け目がないね
レイナーの正体まで掴んだか」
「ああ。一体レイナー君を含めどの様に、どれくらい“賀北会”は“不浄人”を創っていた」
「――」
レイナーは、鉄仮面のせいでこもる声で訥々と話し出した。
――――東京を死の町に変貌させた、“ラズウェル”の人間の誕生秘話を。

・・・・・・

“賀北会”

“廻れ廻れ狂信者共よ。今こそキリストの曙光は放たれた。唯一無二の救済の光は絶滅を持って現れるものと我ら見たり。さあ者々よ目を見開け。信者も異端も人非ざる者に至るまで。磔を用意せよ。杭を用意せよ。地上の者々よ余すとこなく自らの楔に杭を打ち込み雷火を持ってその身を焦がさんと。我々の存在が背信也。裏切り也。

然らばユダと同義の帰結に今至りし時也。我々が絶滅せし地上こそ
地が鳴き天が割れ神の楽園が降り落ちる時也。
――――我等、裏切りの同胞よ。今ここに降り落ちて死刑執行の時
来たれり“

――――ここの教祖が毎度の如く言っていた台詞。
――――こんなのでも元神父である。
栂直哉。
元カトリックの神父。
孤児院経営者にして貧民街の救済活動まで幅広く行う正に聖人そのものだった。
敬虔なクリスチャンであった栂が、こんなイカレ集団に成り下がってしまったのは、
――――旧ユーゴのスラム街の救済活動に従事してからだった。
――――そこで何が起こったかは分からない。
だが、その時から3年、奴は失踪することとなり、再び現れたのは、大量の人体を抱え、カルトの集団の教祖の肩書を引っさげて帰って来た。
――――それからだった。
狂気の思想団体の本格始動は。
そいつ等の思想は単純にして明快。
“現人類の抹殺”
――――救う事の出来ぬ命なら、
――――神すらも救えぬ生命なら、
全て滅べ。滅んで消えろ。祈りと怨嗟と絶望の果てで。それが貴様等人間なのだから。
神の全てを拒絶した愚かな生命の当然の帰結。
――――ならば、どうすればいい。

その考えに至った時。

栂はまさに地獄へと堕ちる覚悟を決めたのだろう。

――――進化の過程で、今の帰結になったであろう今の人類。
新たな人類の誕生の陰で、常に滅ぼされる者たちがいた。
旧人、アウストラロピテクス。
彼らは、ホモ・サピエンス誕生とともに姿を消した。
――――否、殺されたのだ。
ホモ・サピエンスに。
新人類の誕生と共に、過程にあった人類の全てが殺される。そういう性質が、このヒトという生物にはあるらしい。
ならば、
今の人類を滅ぼす為に、
――――新たな人類を作りだそう。そのような帰結になったのだ。
まさに、踏み込んではならぬ神の領域。
ヒトが、ヒトを作る。それも別の種類のものを。
栂は、自身の魂が煉獄で焼かれることも厭わず、ソレに踏み込んだ。
そうして、今の人類が消えた時点で、新たな人類の誕生を待ち、その者達を、神に導いてもらおう。
そうして、出来上がったのが、“不浄人”。
栂は、いまだ体の中で唯一解明されていない脳に着目し、脳に刺激を与える薬を徹底して与えた。
まず、無計画に薬を与えた結果出来上がったのが“前期”不浄人。
脳の運動能力の再配置が行われたことにより常人以上の身体性能と、凶悪なまでの特殊機能が追加された人間になり得たが、いかんせん薬の副作用が強すぎたようで、顔面の表層機関の全てが破壊され、ゾンビの如き風貌になってしまった。
どのような存在になり得ようが、元々あった人間の機能が失われてしまったのならそれはただの退化でしかない、と判断され、一斉処分が下された。

――――その時、運よく逃げ出せたのがレイナーである。
そしてーーーー
その反省を生かし、副作用が現れないほどの間隔を置いて、定期的に薬を飲ませるようになると問題は解決した。
顔の表層機関にダメージを与えることなく、身体性能と特殊機能を持った完璧なる“進化した人間”の誕生だった。

――――が
その団体は一夜にして滅び去ることとなる。
――――自らが創った怪物に喰い殺されて。
２０１３年５月１２日１６時２９分
“灰狼衆”の謀聴用録音無線機に阿鼻叫喚の断末魔が録音された。
――――その地獄の中で、あのダミ声の笑い声もけたたましく響いていた

・・・・

「――――へえ。そういう思想団体だったわけですね。終末思想型のカルト宗派だったと思っていたのですが、まあ自らの存在が罪業と感じる連中はいくらでもいたが――――――――――――――――ここまで自己否定をする宗派も珍しいですね」
「わかってるとは思うが救いようもない連中だ。ヨハネスブルクのヤク中だってこんな悲観的にはなりゃしねえ。神を否定したくないから今いる人間を否定する。それが“賀北会”だ。自らが創った牙に喰い殺される瞬間さえも――――――――――――――――――――――奴等は逃げようともしなかった。最後の断末魔しか上げていなかった」
「――――具体的にはどのような薬を持ってしてその“不浄人”は作られていたのですか？」

「ライオスのクソ爺の部隊が調査に入ったみたいだがデータは紙切れ一ついなかったよ。奴等の本部のバンカーも火葬場だ。なーんも残ってなかったよ」

「レイナー君は、どのようにして倉峰君の下に来ることができたのですか？」

「ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーバンカーをこじあけた」

「ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーえ？」

「こじあけたといっている」

ここで冗談を言いますか。よくよくセンスが分からないお人だ。

あのバンカーは鉄筋でがちがちに固めた電動開閉式ドアで、関係者の網膜スキャンでしか出入りができなかったはずだ

そしてそのドアは指紋検証をすることでしか開かないはず。

信者を襲って指紋検証させたなら“こじあける”の表現はおかしい。

そう思ったがーーーー

「まあ、みてなよ」

そう言うとレイナーは私の後ろに有った窓を開ける。そこでおもむろに左手をその窓の外に向け、凄まじいものを私に見せてくれた。

ーーーーまず左腕が膨張していく。

左腕に空気を注入しているかの如く。

で

新幹線並みのスピードでその左腕が弾け伸びた。

ーーーー私はただただ呆然とするしかなかった。なるほどこれならばあの鉄筋のドアも吹き飛ばすことができよう

「これが“不浄人”の力。“不浄人”は何かしら身体機能が強化されているらしいな。

レイナーの場合細胞再生速度と左腕に限って

膨張ができるものらしい。つまり、心臓と脳が破壊されない限りいつまでも生きられる上に、どんな傷を負ってもすぐ再生してしまう。

――――それだけ見れば、まぁ進化した人間と呼べなくもない」
「――――となると、何か問題があったのですか」
「――」
数秒黙りこくるとレイナーは頷きそのまま鉄仮面を外した
――――そこには
「――――！」
ゾンビの如く表皮が剥げ、肉質をあらわにした顔があった。
それは顔の表層器官のすべてーーーー例え目であっても同じように光を失っている。
「――――これが“前期”不浄人全員に共通する特徴だ。データがないから原因は知らんがろくでもないことばだけは確かだろうよ。データも死体もまとめて“後期”の奴等が火炎放射器遊覧ツアーにブチ込んでくれたおかげでぜーーーーんぶ地獄の窯の中だ。ホントバツが悪い。せいぜい火葬されて安らかにお陀仏になっていることを願っているよ。いやホント」
「その“後期”とは、あのＴＶに移っていた連中ですね」
「ああ。栂の奴、“カタチが退化しては全く意味がない”ってなことで“前期”の奴等の大量処分を行った。その時運よく逃げ出せたのがレイナーだ。で、こいつと偶然会った俺はライオスに報告。そのままあのイカレ集団の諜報任務をものの見事に押し付けられて今に至るわけだ。アハハハハハ。２年以内にあのクソ爺が暗殺されるまたは失脚するに仲間内で1万ドルかけているところだ。まあ、さっさとジジイらしく勝手にくたばってくれりゃ涙を流してあの世へと見送った後は祝賀パーティーを自腹で開くことを約束している。と、いうわけでさっさとくたばりやがれってな話なんですよジジイもラズウェルも」
「そう言いなさんな倉峰さん。世界を最も騒がせた事件の最前線にいるんだ。解決したらあなたと、エイミー・ソルジャーズの知名度も上がりますよ」

「あんなくそ爺の知名度を上げて何が嬉しいんだ。舞い上がって寿命が延びたらどうするってんだよ」

「ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー約束だ。俺達は知ってることを全部話した。お前等の情報をよこせ」

すでに仮面をかぶりなおしたレイナーが陰鬱そうにそう口を開いた。

「ーーーーええ。わかってますよ。それは別の人に話してもらいますので、あと少し待ってください」

「高山か？」

「いえ違います。もうそろそろ来ますよ。

ーーーー事件前、私の親である木坂組と大阪の暴力勢力を二分していたギャング集団のリーダーが」

「ーーーーまさかな。あの暗殺集団まで取り込んだのかアンタ」

「ただの利害の一致です。ただその利害の結びつきが大きいのでそこらの信頼関係より強固な関係ですけどね」

そうーーーその名は

「ーーーーー荒海都」

・・・・

略奪集団“濁り水”団員中村亜鎖黄［無論偽名］視点より

暗殺集団“絶暴”リーダー荒海都との対峙

時は少し前後する。

「いやいや、なんなんだお前等。その人数でそんな粗悪品とはいえ銃なんか持ちやがって。こりゃ、ケツに穴どころか蜂の巣を作りたがってるように見えるがーーー向けている方角が問題なんだよな」

大阪旧神戸市の廃工場内。
俺の目の前にはとある物騒な男が立っている
一目見たら、これといった特徴はーーーー隻腕であることしかないだろう。
その男は紺の、袖がゆったりと長いローブのような外套を着込んでいる。その特徴的な袖は片方、手が通っていない。
そう、この男は４年前木坂組系列の暴力団代海組若頭桐山将悟との果し合いで片腕を切り落とされているのだ。
それまでーーーー何十人もの大阪の暴力団員
を密やかに静かにだが凄惨に奈落の底に沈めてきた荒海の“絶暴”はーーーーその後の消息は不明となっていた。
――――が、ラズウェル事件後、どこの暴力組織も我が身かわいさの為と迅速に覇権拡大をするために広域暴力団に吸収される中でただ代海組だけが木坂組から分裂を行った。
代海組組長代海蓮華は桐山将悟を筆頭に武闘派の連中の木坂組からほとんどを引き抜き分裂を行っていた。
――――その為、暴力行使能力を大いに削がれた木坂組はその補強を行ったのだ。
――――それが、“絶暴”との提携だった。
まさに誰もが考えはしなかった奇策だったであろう。
いままでフリーの殺し屋のような形で仕事を行っていた荒海だが、桐山将悟との果し合い
で敗北して以来行方をくらませていた。
それが今、こうして嫌味を垂れ流しながら目の前にいる。
「なあ、濁り水ども。
――――文字通り寄せ集めの三下共が、俺を殺れるのか？
――――ここでの垂れ死ぬようなゴミカスがいままで、暗殺稼業をやってこれたとでも思ってるのか。
――――甘い。甘いぜ。泣けてくる程な。
――――認識が足りない者は早死にする。それを教えてやらんとな」

「――――ぬかせ。お前等は尾行するのに慣れていても、尾行される方には慣れてなかったみたいだな。のこのこ一人で歩きやがって――――死ね」
そうだ。
こいつ等は神戸周辺の見回りを行った後その後散開しやがった。バックスバニーの犬並みに間抜けな連中だ。
いくら腕利きの暗殺者とはいえ、何十もの弾丸をよける奴なぞそんなもの人間ではない。
――――が
この状態においてもまだ奴は薄ら笑いを浮かべてやがる。
「――――で、俺の首にはいくら懸かってるのかな」
「――――18万ドルだ」
「代海組はその二倍懸けていたのに、安くなったもんだな。
――――まあ、お前等にはもったいない価格なのは確かだな
――――バックスバニーのワン公は手前等だったな。ケツから罠に引っかかったのに、最後の最後まで気が付かなかったもんなぁ
――――さいなら」
その言葉を最後に俺たちは
――――自分にかかる影を見た
「えっ」
――――頸動脈を裂いたナイフの微かな風切り音と鮮血と共に。
「が――――――――――――――――――――――――アアアアアアアア！」
背後には――――――――――――――――――――――――荒海と同じローブのような袖の外套を着こんだ男たちが倒れていく俺達を悠然と見下ろしていた。
――――“絶暴”
「な――――――――――――――――――――――――ぜ」
「何故かって？この期に及んでわからんのかカス共。誘導されたのはお前等。

————あらかじめ隠れていたこいつ等にも気付かないとはね。バカもここに極まりだ。
とっとと死ね」
————そういうと荒海は立ち上がり俺達を蹴とばした。
「——————————————ま、寄せ集めのバカにしては中々堂に入った尾行だったよ。笑いを抑えるのに大変だった———————————————————————
————ご愁傷様。
じゃ、江崎にばれたら面倒だからここ爆破するから。ごめんね」
俺達は、最後の恨み言を残す。
意味ないことと知りながらも。
「———————————————畜生。江崎さんさえ——————————————江崎さんさえいりゃあ手前等なんか————————————————」
「————しまんねえなぁ。最後の言葉が負け惜しみか。ま、いいや」
荒海が工場から出て、薄れていく意識の中俺たちが最後に見たのは、
————ぼんやりとした紅色と、麻痺した感覚の中でも一際映える灼熱の温度だけだった。

・・・・・・

旧大阪府役所　知事室倉峰遥斗の視点より

————俺の目の前に立つ男を視点を切り替え切り替えして、“見る”
思考の方向性と主観を切り替え様々な観点から本来カタチの無い“

個”としての人間を見るのだ。思考をシフトして人間を観察する。
これが俺の人間観察法だ。
そうして切り取られた“車谷謙三”という人間を“見る”と、
――――なるほど
この何気ない会話の中にも感じ取れた。
――――奴も俺と同じことをしている、と。
その時点でわかった。奴は指導者のタイプとして、ライオスのジジイとはまた違う人間だ
ライオスを“鉄人”とするなら奴は“狐”
誰にも自分の考えをさらさせず、人知れず謀
の根を張るタイプの人間だ。
何故判断できるのかって？こんなタイプの人間は戦場で腐るほど見てきた。優秀なやつも愚鈍な連中も含めて諸々。
――――この男が化物じみた天才だということはわかる。首都崩壊後の大阪をここまで生き延びさせてきた手腕は本物であろう
――――だが
「――――さて、“死神の眼”から見てあなたは私をどう見ましたか？倉峰さん」
「――――あんたは俺と同類だが、格が違うな。だが存在価値性が違う」
「――――ほう」
「あんたは多を生かすため。俺たちは不都合な小を消すため。存在価値そのものが違う」
「――――そうは言うけどやはり、私もあなたも多にとって都合のいい存在でしょう。
――――都合がいいも悪いもその多が決めることですから。務め人はつらいですね」
「いつからお前たちヤクザが務め人になったんだよ。本当に世も末だ」
「まあ、表世界に出られただけ感謝したいところです。あんな稼業

やっていてよく生きてこられたもんだと思っているくらいですからね。ありがたく務めさせていただきますよ。
まあこの大阪も繁栄はしていますけどね。
繁栄させているのは私たち含めてろくでなしによるものですから」
「――――本当にな。こんな場末のチンピラ引き入れるあたり、どれだけ人員不足かが分かるぜ。街見回すと外出てる連中は黒白分かれたスーツ連中ばかり。これこそ末期だと思ったぜ俺は」
――――知事室のドアの前には壁にもたれかかった少年が一人いる。染めているのかいないのかブロンド色の髪を肩口までかけ、丁寧に整えられた顔を虚空に向けてしゃべっている少年がいた。
――――芸術品さながらの美貌と、雰囲気をだしているこの少年は、だがそれにあるまじき欠陥が存在した。
――――隻腕だったのだ。
あるべき左腕の造形がもはや跡形もなくなっている。
「――――あんたが？」
「ああ。荒海都だ。
暗殺と斥候の請負チーム“絶暴”のリーダーをやらせてもらっている。
――――まあ、この腕はな、唯一の若き日の過ちのようなものだ。むしろ今は片腕のほうが都合がよくてなあ。重心移動の幅が広がった。だから、ほら」
瞬間
――――荒海の姿が消えていた。
「――――ハ」
笑みがこぼれた
――――それほど見事な移動術だった
荒海は半円状に体幹を廻し、その勢いと重心の方向のまま野球のライナー球が如く駆け飛び俺の肩口を通り過ぎたのだ。
俺の背後に着地するまでの秒数、僅か2秒。
――――だが、感心している暇もなかった。

何を思ったか荒海がその華奢な体躯に似合わぬ剣呑な軍用ナイフを抜き放っていたからだ
――だから俺は、
――背後にたった荒海の腕を取る。
「――――――――――――――なっ！」
それを逆関節を極めてから一気に体重をかけて、背負う。
――が
荒海は手首の関節を外しつかんだ腕を引き剥がし、その勢いのまま俺の顎を蹴り上げる。
――が引き剥がされたときにすでに振りかぶっていた左腕で俺は荒海のレバーに直突を行う。
俺はそのまま後ろにぶっ倒れ
荒海は知事室の壁に派手にぶち当たった。
それと同時に拍手が鳴り響く。
「素晴らしい。荒海君のその動きに対応できた人物は君が初めてです。やはり、エイミー・ソルジャーズの懐刀の名は伊達ではなかったのですね」
「そんなことはどうだっていい
――荒海、お前が持っている情報とやらを教えろ。そのために俺は来たようなものだしな」
「わかってるって。
―――――――――――――――――ああクソいってえなあ畜生。
アンタも容赦ないねっと」
そういうと荒海はのっそりと立ち上がる
そして袖口がゆったりとしたローブを、幽鬼のようにはためかし表情を性悪なものに替える。
「最近な、イギリスの経済状態が破産寸前だと聞いたことがあるか？」
「ああ」

グレートブリテン及び北アイルランド連合王国。
確かイギリスの正式名称はそんなんだったっけ。
いま、もはや“寿命2年”とすら申告されている“古代”大英帝国。
寿命を縮めたのは新しく首を挿げ替えられた大統領の愚策によるものだった。
――――アメリカの住宅バブルを背景に、イギリスのほうでもアメリカのサブプライム証券の大規模な買い取りを支援する政策を打ち出していた。
だが、所詮サブプライム、つまり信用度の低い人間向けの屑証券である。その屑が世界中で買われた背景にはどれほど信用度が低かろうが住宅担保で元が取れていたからであろう
――――がそのバブルもついには弾け飛ぶ。
住宅の価値が下がった瞬間、すべてが終わった。
屑債権の唯一の内在価値が失われたとき残ったものは餌を無くし、血に飢えた獣と化した債券者と、2重3重の債務のみが残ってしまったカモの山だけだった。
それは国ぐるみでその屑債券の取引をしていたイギリスもまた然りである。
「バブルが弾けるのは日本見ればわかるでしょうに――――――――――――――――――――――――――――――――まあいつの世も変わらないってことですか」
そう、しみじみと車谷は呟く。
荒海は皮肉気な冷笑を少しも崩さず車谷に話しかける。
「お前も外資のフロント持っていただろうに
大丈夫だったのかよ？」
「あんな屑債券に私が手を出しますか。
――――まあ、それを機にイギリスは大規模な労働争議が頻発しました。元々北アイルランド紛争を例とすればわかるように宗教の対立が思ったより結構深い国ですし。
――――こういうことには敏感に揚げ足取りが起こるのでしょう」

「そんなことはどうだっていいんだ。それこそサブプライムで内臓の転売にまで追い詰められている債務者位な。それがどうここで繋がるんだよ。きっちり説明してくれ」
「白人主義の美国人どもの考えることは同じってことだ。
――――またまた米につづいて奴等は生命換金業を始めようとしやがった」
「ああ――――――――――――――――――――。なるほど」
すべて納得できた。確かにここで持て余し気味の世界第二位の軍隊を使うべき、と発想してもおかしくはない。
――――だが
「ですけど、残念ながらアメリカほど簡単にドンパチを始めるわけにはいかないんですよね。ＮＡＴＯの手前、利潤目的の戦争をするわけにもいかないですし。奴等は“ヨーロッパの正義の御旗”を背負わされてるんです。もし戦争などやってしまったら世界中で自分たちのことは完全に棚上げして大ブーイングが起こります。
――――なら、正義の御旗を振るえながら戦える場所――――例えば生物兵器によって犯罪組織に首都を奪われてしまった国とかだったらーーーーどうですか？」
「――――なるほど」
つまるところ、兵器産業をもうけさせるために日本がいいダシにされているというところか。
「奴らは国際会議の場で“日本の犯罪組織駆除”は我々が行う。だから軍事費を廻してくれときやがった。
――――アメリカは爆撃機消失と、別の中東あたりの戦場を抱えているせいで逃げ腰、ロシアは自分の所の子飼いの元チェーカーに新型兵器を持たせていたことが露呈するのが嫌なので静観を決めきってるし、中国はいまだに何を考えているかが分からないしで捨て置かれているから今の日本は放置国家もいいところだ。
――――だから、イギリスが入ってきたわけよ」
「で、ここに協力を持ちかけた、と」

「全くその通りです。大阪だけが唯一まともに機能している日本の都市ですからね。まあ
傲慢そのものでしたねあの美国人。あいつ等の頭の中は大英帝国の覇権国家時代から時が止まっているようですね。多分、白人以外の人間がいなくなれば遺伝子改造で豚の鳴き声すら“白人万歳”と叫ぶように調整するでしょう」
「で、そいつらが低俗な猿と手を取り合う理由がソレかよ――――――――――――――――――――――――手段を選んでいられなくなってきたんだな」
「さて、で、そこで問題が発生したんだ。
――――主導権が誰もちなのかということでな。
俺達にとってみりゃ、こっちの神聖なる悪徳の町を奴等美国人共に土足で踏み歩かせるわけだから日本での指揮権は当然こっちにあると思うわな。
――――だがやっこさんは違ったみたいだ。
極道とチンピラのイエローモンキー軍団なんかの屑にも劣る脳味噌の持ち主なんか、オツムの出来具合が怪しいから出直して来いだとよ。一度奴らの頭の中にシリコンをぶちこみたい気分になるぜ全く。
――――そんなわけで今揉めに揉めてる。どっちかの脳漿が吹き飛ぶかもしれない次元までな。
そこで、俺たちはこう提案したわけだ」
「代表者同士で正々堂々戦い、勝利したほうが指揮権を持つ、それで手を打ちましょう、と」
――――なるほど。確かに手っ取り早い。
――――いや、待てよ。
「まさかその代表者ってのはーーーー」
「あなたです。倉峰遥斗君」
・
・
・

・　・

旧京都府　国立公園　桐山将悟視点より
とある囚われのイラン人との対面

親愛なる代海組長へ、元気ですか
こっちはすこぶる元気です。
「あんた方はさ。考えたことある？
麻薬ってのが、なんでこの世に生まれ落ちたのかって？」
今貴女が命令した処理対象と接触いたしました。少し茶目っ気をだして極道らしいセリフの一つなど吐いて見せます。
「人の意識を宇宙の彼方まで飛ばして、寄生虫が如く残りカスが体内にウジウジ依存した挙句相撲取りの体系をしたマトリックスに追いかけられてると喚き通しやがるようになる魔法のクスリだ。素晴らしいよねえ。
――――こんなもん人類にとっちゃあ百害あって一利なし。
――――なら、俺達のような裏街道の人間にとっては得をしたのかね？
――――そんなこたあ無い。
結局人間にとって破滅をもたらすだけのケシ畑を守るためにどれだけ俺たちの血が流れたんだろうな。元々暴力団にだって意味があったんだ。自己中心的で民主主義の原理をパンの耳ほども理解していない労働者団体や、立場によっては左翼、右翼の連中の対処。
高利貸しの仕事だって、毎日毎日にっちもさっちも行かない連中の手助けをしていると言えなくもないんだぜ。
――――だが、麻薬の販売なんぞという外法を使ってしまったことで、それらの本分がそっちのけになってしまった。
木坂組は、そのことをよーーく分かってたんだろうよ。薬には手を出さなかった。
――――全部悪いのは麻薬だよ」

――――イラン人がこちらを見ています。
彼らは、まあ典型的な麻薬密売商です。
今行政が機能していない日本に目を付けて、誰からも監視を受けることなく大手を振って麻薬を売り飛ばすつもりだったんでしょう。
全く馬鹿ここに極まり、です。日本の暴力集団の勢力図を一度でも調べ上げていたならばこんな無謀な計画は立てなかっただろうに。
彼らが無謀にも足を踏み入れた所は旧京都府。
今や新たな代海組のシマとなったこの場所で、中国のマフィア連中と取引を行う予定だったという。
――――こちらとしても、このような状況になったおかげで死体処理もそのまま川に放り込めばいいだけのぞんざいな方法で済んでいるのだ。死体の一つや二つ、増えた所で痛くも痒くもない。
――――哀れです。
「麻薬があったおかげでヤクザ連中は自分の本業を忘れちまった。
そんな仕事より手っ取り早く金が入るからな。
――――でもな、人間破滅させるだけのクスリ作りに躍起になってそれをパンパカ売り飛ばすなんてなってしまったら、司法の連中も動かざるを得ないだろう？それに裏稼業同士の抗争も増えちまった。
結果、麻薬は俺達も
堅気も一切の得を与えていないんだよ。
――――極端な話、本当に麻薬は地球が人類を滅ぼすために作ったんじゃあないだろうか
ヤクザも堅気ももう麻薬から抜け出せない。
どんどん両方破滅していく。麻薬は人類の敵だよ。
――――まあ、分かっててもも手を出してしまうんだよな。金も快楽も手っ取り早く手に入る。素晴らしい毒薬だよ」
イラン人の動きが怪しいです。手が。
縄で手を縛り上げており猿ぐつわ姿です。
――――大方、袖に隠したナイフを使って、縄を切っているのでしょう。

――――本当に哀れです。
イラン人が理解できない言葉を発しながら、こっちにリボルバーを向けてきます。
――――吹き抜ける轟音と血潮
――――脳漿と共に公園の緑を紅に染められたのはイラン人だった。
さすがデザートイーグル。この反動、半端ないですね。
イラン人は頭の半分を吹き飛ばし、ただの肉塊になっています。
これで一件落着ですね。代海組長に連絡をしましょう。
海外の電波を拾って作動できるように改造した携帯電話を手に取ります。
「桐山です。麻薬密売商の排除。終了いたしました。これから戻ります。
――――えっ。ああそうですか。
了解です。ようやくあのいけ好かないオヤジとの闘いになるのですね」
――――桐山は薄く、微笑む。
「あの“化狐”車谷と――――――――――――――――――」
――――5年前。
麻薬王、ナギ＝ジャン率いるトラスト・ブレインとの抗争において、権謀算術の限りを尽し撤退にまで追い込んだ、木坂組において伝説の人間の一人となった男の名と、異名を呟いていた。

・・・・・

高山九山視点より、倉峰遥斗との邂逅

「おーおー。高山九山ではありませんか。
公民に恂ずるはずの官僚のくせして、防衛省という立場を利用して

人民の敵たる暴力組織に武器をリクルートしだして早8年。
その金塊を詰め込んだとしか思えぬビール腹はまだ健在のようですなぁ」
――――まだくたばってなかったんだな。いやぁ良かった。
――――このガキは俺が地獄にたたき落としてやらんと気が済まんからな。
「いやいや。数多くの同類を澄ました顔して赤い蜜入りの蜂の巣に仕立て上げてきた倉峰さんこそお変わりなく。その天使の如きお顔をどれほどの死体が見たでありましょうか。
恐ろしいことであります」
このガキの生意気ぶりも拍車がかかって来たな。ますます殺したくなってくる。
――――実際、俺はこいつに一度嵌められかけた。
――――武器取引を行ったヤクザの連中がある日カチコミにあった。その相手は同業者の抗争でもなく、サツの連中でもなかった。
――――倉峰の“灰狼衆”だった。
そのヤクザ連中はコロンビアの“麻薬王”ナギ＝ジャンの取引相手の一つだった。
――――世界最大の民間軍事会社の“キリングワイス”と現在一触即発状態にあるのが、倉峰の所属するエイミー・ソルジャーズ連盟である。
――――キリングワイスは元々の傭兵業以外に武器の仲買業や、犯罪組織の護衛業までやりだしたのだ。
そのうちの一つが、“麻薬王”ナギ＝ジャンのケシ畑の守護任務だった。
――――ならば、と
――――キリングワイス壊滅計画の手始めに“麻薬王”の情報を奪取せんと、取引相手だったヤクザ組織を急襲したのだ。
――――その“ついで”とばかりに奴らの武器取引相手の情報まで取り出しやがったのだ

――――もしあの時偽名を使っていなかったらカービン銃の弾丸でミンチになった俺の肉体は禿鷹にむしゃぶり喰われていただろうな。
――――その時、倉峰が仕掛けた二重の罠に見事に引っかかりそうになり、俺の首は火星まで左遷されそうになっていたのだ。
――――このガキだけは俺が地獄にたたき落としてやる。その時そう決意したのだ。
「はん。お変わりがないようで。いつ不摂生が祟って肝臓ガンにならないか不安で不安でしょうがなかったんだが、やはりまだ大丈夫っぽいな。ケツが原寸大に刻まれかけてもまだ懲りんか」
「ククク――――――――――――まあ、次の代表戦でくたばることを期待しているよ、クソガキ」
――――まあ、そんなことでくたばるガキじゃない事位はわかってるさ。
――――だが、思わぬ苦戦はあるかもな
「――――車谷から、相手、聞かされたか」
「――――ああ」
そうして、
いつも文句を言いながらも飄々としているこいつにしては珍しく苦々しい表情をしている
「――――イギリス王家からその誉れある経歴と戦果から新たな姓を与えられた一族。
――――アトラス家。その長女クライア＝アトラス」
「よくわかってんじゃねえか」
「聞けば聞くほど胡散臭い貴族だ。
――――アトラスの名を与えられたのも４００年前異能の力で吸血鬼を討ち滅ぼしたからだとか調べたら出てきやがった。
――――もはやよく言えば伝承、悪く言えばオカルトと疑われても仕方がない情報がイギリス王家の書庫に堂々と存在していたのが信じられん」
何故、イギリス王家の書庫の閲覧ができるのかなどと疑ってはいけ

ない。この男の背後の組織の情報網はアルカイダから皇室まで幅広く分布している。実際、そのおかげで俺は破滅しかけたのだからな。
「なんにしてもここであわててても仕方ない。
さっさとやってさっさと玉砕して来い。骨は拾っといてやるよ」
「そりゃあいい。
――――あんたも、こんな商売続けてると、絶対いつか破滅するよ」
「そりゃ、わかっている。だが安穏とした人生ってのも中々地獄だ。ジジイになって死ぬ前に残っていた記憶が机にかじりついてるだけってのは、想像もしたくない」
「――――なるほど。安穏とした国の住民だからこその渇望、か。俺としては生きてるだけで幸せだと思うのだがな」
おやまあ、本当にこの男のセリフかい？俺以上に切った張ったの世界を生きてきた男が何を言うか。
「それお前がいうのか！
――――おいおいどうした。
アンクルサムお抱えの生命換金屋のケツを吹っ飛ばしてきた男が何を言う？お前は、じゃあなんで傭兵なんかになったんだ！
――――あっ」
そういえば思い出した。
――――こいつはーーーー
「――――高山。俺はな、安穏と生きるべき人間の人生を叩き壊したんだ。そいつが何で、どんな顔してこれから普通の人生を歩めというのだ。そして俺は、これ以外の生き方を模索する気もおきない」
そう言った倉峰の表情は、何の感情も浮かんでいなかった。
――――これこそが、今の倉峰の本質。
自らの意思で感情を消し、人生を否定し、幸福を否定した人間の末路。
普段の仮面を引っぺがした、倉峰の姿だった。
「さて、しみったれた話はここまでとして。
――――高山、依頼だ」

「――――ほう」
倉峰は俺に紙を渡す。
――――多分、俺の顔は青ざめていただろう
「おい――――――――――――――――――――――――これ、何に使うつもりだ？」
「――――――――――――――――――――――――――――決まってんだろ。戦争だ」
――――こいつ――――――――――――――――――――。
俺は青ざめた顔で静かに頷いた。

・
・
・
・

――――４ヵ月後、現在
倉峰、高山、荒海の３人で治安維持団体“サファオル”を設立した。
サファオルは詰まる所警察である。
高山は武器の供給を行い、倉峰が警官と自衛隊の役目で、荒海が公安。
――――ただ普通の警察とは多少倫理観が違う。
普通の警察は武器は持っても使用しないのが原則だ。生きて被疑者を確保することを前提として動いている。拳銃の発砲することは出世が止まる、のイコール関係である。
――――だがエイミー・ソルジャーズ連盟の傭兵は全員が携帯している武器は軍用オートとＡＫ４７――――ロシア製のアサルトも携行している。
――――現行犯であるならば射殺も許可されているのだ。さらに突っ立ているのが制服姿のやる気のない雰囲気を醸し出したジャパニーズポリスメンではなく、全員黒ずくめのトレンチコート連中であるので威圧感も凄まじい。
ここまで威圧的な演出をした理由として、

――――マフィアを顧客としているので治安維持隊の権限を強くしなければやってられないのだ。
――――そして荒海の“絶暴”は対内、外の諜報活動と潜入工作を司っている。
ーーーーこの都市の秘密を探ろうとするジャーナリストや各国の諜報員を大阪からたたき出すのが主な役目になっている
事実、そういった人間は数多くいたが、城壁で固められた大阪の街からたたき出され、六十四式自動小銃を引っさげた迷彩色の連中や死に物狂いで日々を生き残っているハイエナ共に尻の先までむしゃぶり喰われている有様でもう誰も入ってこなくなった。
こうして、大阪は自治に必要な全ての物が揃った。
暴力、産業、民、体制全てが。
――――さて
長い長いプロローグはここで終了だ。
本編はここからスタートを切る。

目録1　　見知らぬ罠

車谷謙三視点より、高山九山との対話
「全て、全ておかしい。
――――笑えよ、車谷。
倉峰のクソガキ、ウィル・オート・サムソン社の最新モデルを三千丁持ってこいとぬかしやがった。
――――しかも驚け。泣く子も月まで吹っ飛ばすアンチマテリアルライフルときやがった
――――冗談じゃねえぞくそったれ。
奴はなんだ、ゴジラとでも決闘するつもりなのか？正気の沙汰じゃ

ねえ」
「へえ、対物ライフルときましたか。
――――まあ、これから車両との闘いもあるかもしれないですし、さすがにそのライフルに対抗できる戦車はどの組織も用意できないでしょう」
――――アンチマテリアルライフル
装甲車やヘリコプターなどの車両や、塹壕ごと敵を吹っ飛ばすためのライフルです。
無論、使われるライフルも弾丸も反動も通常の比べ物にならない比較となるでしょう。
そんな剣呑なライフルをあの怪物集団が持ったのです。そりゃ、高山も気が気でないでしょう。
「で、そんなことはどうでもいいんです。
――――ハワイとの連中との武器取引はどうしました？」
「ああ
――――そのことで話があるんだ」
高山はいつもの神経質そうな声で細々としゃべり出した。
――――経緯はこうです。
高山は最近武器の相場が激しく変動していることを訝しみ、その震源場所を調べていた。
――――その震源場所があろうことかハワイアンマフィア崩れのチンピラだったのだ。
それはまさにライターを持った猿人類が百万人の米兵を相手にして勝つぐらいありえないことだった。
それを訝しんだ高山は自分のコネクションからそのチンピラたちに連絡を取り、取引を持ちかけたのだ。
――――そこで見たものは
「信じられるか車谷――――――。
――――これが奴らが俺達に売り飛ばしてきたものだ」
傭兵がそこでこの部屋に入り、ハワイの“お土産”を持ち運んだ

そこにはーーー軍用オートの拳銃から、特殊部隊仕様のサブマシンガンからＲＰＧまでより取り見取り。約２００点
――――さすがの私もそれにはビックリしましたが、あり得る話ではあります。
チンピラを使って、危ない橋を渡らせるのはよくある話です。今回、それが私の知りうる限り非常に大規模だった。それだけです。
――――けど。
「――――まあ、何にせよ今は事態を見守るしかありませんよ。事実、これだけ武器が手に入ったのは喜ばしいことです」
「そう楽観的でいいのか。
――――ガキでもわかる。絶対に裏があるってな。もっと信じられねえことに値切りもしないうちにあのチンピラどもこの山の様なチャカを定価の3分の2で売りつけやがった。
それに更に買うんだったら今度は半額にするとだとさ」
「大盤振る舞いですねぇ。不況の時代に素晴らしいです」
「いつの時代もチンピラの財政状態は変わんねえよ。
――――危ない橋渡らせるような小物は利益を黒にしなけりゃ目ん玉をはも切りにされる身分だ。本当に奴隷にも満たん扱いだぞあいつらは」
相変わらず口が悪いですねえ。荒海君といい
倉峰君といい、私の下にいる方々はどうも良い教育を受けていらっしゃらないようで。
「――――倉峰君は今どこにいらっしゃいますか？」
「あのクソガキは中国軍の駆除に行ってるよ
依頼が入ったんだとさ。今また四国を占拠したらしい」
「――――多少、嫌な予感がしますね。
――――でも、まあなんとかなるでしょう。
倉峰君なら少々の問題なら灰燼に帰してくれるでしょうから」
――――彼なら冗談抜きで一日でこの都市を吹き飛ばせますしね。
少し、寒気が走った。

・・・・・・

――――時は６年ほど遡り
倭田玄朗斎視点より　死神の弟子との対話

目の前に立つ怪才を、儂は虚空を眺めるがごとく見る。
数か月前、弟子となったこの少年は倉峰遥斗という。
そう。ほんの数か月前の話だ。
この豊食の時代における子供に似つかわしくないボロ衣を着込んで、儂の家の前に物乞いをするでもなく、立ち尽くしている少年がいたのだ。
元傭兵の儂にとってそんなガキは一瞬でも憐憫を感じるものでもなかった。戦場では笑い半分に妊婦の腹から子供を引きずりだして、その子供が男か女かで賭けを行っていた連中も居た位だ。その程度で命を削って築き上げてきた富を恵んでやろうと思うほど人間ができて居ない。
よって儂が自分の家にそのガキを招いたのは別の理由があるということだ。
それは、言ってしまえば好奇心だ。
そのガキの目は、戦場ですら見たことがないほどーーーー得体のしれない何かを見据えた目だった。
その眼の正体がすぐに分かった。
――――そう、
この少年の眼は常に“死”を見据えている、と。
立ち会った理由はいたって単純。このガキを招いた衝動の元である儂の“好奇心”を充足させる為。それは狙い通り、理解することとなる。

そして木刀を渡して、立ち会ったのだ。
そこで、理解できた。
その眼から伝わってくるものは、自分が殺される未来を強制的に思い浮かばせ、死への不安を駆り立てる圧倒的なまでの殺意。
――――それは、この世界に人として体現された、
死神、そのものだった。
儂は、思った。
――――この“死神の眼”を持つ少年は、この世界にとってとんでもなく影響力のある“劇薬”であると。
生きている限り人間は化学物質と同じだ、というのが儂の持論だ。
良くも悪くも周りと反応を起こして変化しながら、別のモノになっていく。それはあるモノには毒となり、また別のモノには薬にもなる。
――――だから、
――――こいつは、儂にとっての“薬”でなくてはいけない。
儂は自分の持っているすべてをこの華奢なガキに伝えることを決めた。

・　・　・

「さて、と」
――――身の程知らずのアカの連中が馬鹿面さげてやってきた。連中の軍服を更に濃い紅に染め上げて養殖場の餌にしてやれーーーー荒海の絶暴の組員からそんなありがたくもない依頼を受け、今俺は１０台もの装甲車を引っさげてやってきている。
あの共産主義の皮を被った欲深の魔人共の血で海を汚すのは何かと遺憾だが、そろそろ道理の欠片もわからない腐りきったおつむに血の鉄槌を下すのも悪くはない。それにーーーー新配備のアンチマテリアルライフルの実戦使用もしたいところだったこともあり、この仕事を受けたのだ。

眼前に見えるのは、今だ戦火の残り火が燻る瀬戸内の島々が見える海。
――――さて。
――――到着した。
・・・・
車谷謙三視点より　知事室。
とある傭兵からの緊急連絡。
携帯のバイブが鳴り響く。倉峰君からでした
「一方的にかつ一時的に戦いを止めた――――――――――――――――――――ですか。
――――理由をお聞かせください」
「傭兵としての経験と勘からだな。
――――ホント、糞みたいな仕事だ」
訥々と倉峰君は話し始めました。
・・・・
倉峰遥斗視点より　山口
四国を根城にしたのなら次はここを占拠するつもりだろう、と考えた俺は部隊を山口の海岸沿いの崖から狙撃隊を配置し、陸に上がったアカの連中の脳漿をきれいに吹き飛ばす予定だった。
山口と定めた理由として山口はいまだ自治を続けている数少ない都市だからである。
大阪のように海外の連中と手を結び都市システムまで完全に残して

いるわけではなく、漁師の連中や農家の方々が自発的に集まり自給自足によって自治をしているところだ。
――――もしも四国から山口の近辺の広島などに上陸した場合、この山口の自治団体に気取られる。
そいつらが逃げ出して、そこから巡り巡ってほかに情報が入ってくる可能性がある。なぜなら現在九州はアンクル・サムの“救助隊”もしくは“監視隊”がいるのだ。
中国軍は米の部隊とやりあうのは好ましく思わないだろう。だから死人に口無し。夜襲をかけての殲滅戦を行う。だから配置はここなのだ。
――――そいつ等は目立つのはよろしいとは考えないだろうから小型船で来襲するだろう。ならば大丈夫だ。
――――狙撃隊が持っているのはアンチマテリアルライフル最新モデル。対車両用の怪物ライフルだ。小型船程度の防弾ガラスならば中の人間ごと打ち砕くことができる。弾頭の先端に炸薬が仕込まれているため防弾仕様のガラスなど紙切れに等しい。
だが――――。
――――全てが、おかしかった。
「――――おい」
――――そのスコープから除いたその連中は、アカの軍服らしきものは着ていた。
――――が、傭兵の俺だからこそわかる。
――――精巧に作られているとはいえ、その制服は偽物だった。
「どういうことだ」
しかも、軍が使う船舶ではなく、ただのクルーザーに乗っかっている連中だった。
更に追い打ちかけるようにその運転は今までぶつからなかったのが不思議なくらい、適当極まりない運転だった。
「――――――――――――――――――――――――――――――――――――――」

ーーーーーーーーーーー悪い夢でも見ているようだった。

車谷視点より

「と、いうわけだ。指示をどーぞ」
「船底を打ち抜いて沈めてください。漂着と同時に縛ってくださいね。情報を聞き出すためなら煮るなり焼くなりお好きな方法をお取りになっても構いません」
「ラジャ。特別ボーナスの用意もよろしく」
「それは依頼人の荒海にご請求を」
「ならいーよ別に。荒海の依頼通りこいつらのケツを原寸大に刻むだけだから」
「貴方も上手ですね。いいでしょう。用意しておきますから依頼通りによろしくお願いいたしますよ」
「再度ラジャ」
電話が切れた。
「ーーー」
嫌な予感は悪寒となって息をひそめる獣の如く体内の中で息づいている
「ーーーーまさか」
それはただの推測であったが、限りなく確信に近いものであると車谷は確信した。
ーーーーやばいです。
「ーーーーっ。桐山っーーーーーーーーーーーーーー！」
そう、呟いた。

倉峰にまた視点、戻る

「奴らの正体の裏が取れた。
“小爺龍”。中国３大マフィアの１角だ」
――――小爺龍。
政府筋に血が繋がっている組員を数多く保有し、中国の自由経済への方向転換をいち早く知ることができたおかげで、地価の跳ね上がりを見越しての不動産業でのし上がった連中たち。
中国政府も、経済の自由化の恩恵を得られるのは一部の高級階級層のみという政治内容を決行する為には、不満分子を抑え、鎮圧し、締め上げる暴力装置が必要であると考えたのだろう。政府関係者とパイプを持つ連中が集まり、マフィアと化した。それが小爺龍だ。
解放軍崩れの連中を大いにリクルートし、他の二大勢力を退け、ここまでの組織になった。
仕事内容は不動産業と、政府筋のコネを用いての独占的なサービス業務以外は実に簡潔だ。
毎日毎日、４０元のお給料で血反吐を吐き垂れながら仕事をしている連中たちの不満の渦を暴力で萎えさせるのが目的だ。
にっちもさっちもいかない連中たちの金融会社になってあげ、天使の祝福と悪魔の顔を使い分け、貸した金の金利をゲヒャゲヒャ笑いながら膨れあげさせ、一次欲求以外のお粗末な野心すらも起こさせないようにする。その為に大いに政府から可愛がられている連中だ。
それにしてはお粗末な襲撃だったように見えたが、どうやら外で拾われたチンピラをけしかけたみたいだ。
――――それが何を意味するか分かるか。
「奴等はあらかじめ俺達の襲撃を予期していなかった、ということですね」
ご明察。
せいぜい連中は、山口の寅さん方を血祭りにあげてほかの勢力への示威行為にでもするつもりだったんだろう。さすがに俺達の相手をするのに飲んだくれをけしかけるほど頭のネジが緩んではいないだろうと信じたい。

「――――早く、情報の出元の確認を急げ。
下手すれば嵌められてるかもしれないぞ俺達は」
――――だが、誰に？
ここで俺達に小爺龍の連中を血祭りにあげさせて得する人間は誰なんだ？
「状況推理ですが、嵌めかけたホシはほぼ特定できました」
「誰だそいつは」
「桐山将悟です」

・・・・

車谷謙三視点より　会議

「――――状況の説明をいたします。
高山のコネを使い3日前に高山と取引を行った連中の居場所を特定、拿捕いたしました。
彼らは元々ハワイアンマフィアから追い出されてチンピラに成り下がり、いえ元々チンピラ同然の無能だったから叩き出された、という口です。まあ危ない橋を渡らせるにはそれで十分だったのでしょう。彼らに危ない橋を渡らせようとしたのはーーーー半ば予想通り桐山でした」
「――――げっ、あのオッサンかよ。
――――まあ、あり得る話ではあるな」
荒海はそう呟きます。まったく自分の手を斬り落とした人物だというのに、大した胆力です。
「桐山の経歴を教えてくれ」
「過去、荒海君の片腕を切り落としました」
倉峰君の表情が固まります。
――――初めてですね。倉峰君が驚いている表情を見るのは。

まだ説明を続けます。
「１４歳のころ、暴力団員への傷害事件を起こしましてね、３年間少年院に入りました。――――信じられますか。銃を持った大人たちの集団を短刀一本で全員再起不能に仕立てあげたのですよ。それからその当時若頭だった代海蓮華が気に入り、盃を交わします。汚れ仕事の処理能力が飛びぬけて高かったみたいです。元々代海のシノギは相当無茶なのが多かったですからね。それができたのも桐山のおかげでしょう。
――――半ば伝説と化していたのですが、桐山の兵隊は本職の傭兵をも地獄にたたき落としました」
倉峰が嘆息する。
「――――ウソだろ」
私だってそう思いたい。だが、事実なのだ。
――――六年前。
木坂組最大の危機と言われた史上最悪の抗争。
――――世界最大のケシ畑を所有し、構成員６０万人を超す、アジア各国にコネクションを持つ麻薬マフィア、“トラスト＝ブレイン”そいつらが仕向けたプロの傭兵集団を、見事迎撃したのが桐山将悟の部隊だった。
「これがもとで、もう関西の暴力組織は木坂組に歯向かう人物がいなくなりました。まあ若干ひとりいらっしゃったようですが」
「俺を見るな」
荒海が、バツが悪そうに言い放つ。
とことん嫌な思い出なのだろう。
「ああクソ――――――――――――――――――あの後何年幻痛に悩まされたと思っていやがる」
倉峰が納得したように言います。
「なるほど、行方をくらませていたのはそのせいか」
「まあ、それもある」
荒海はその間何をしていたのか私にも明かしていません。

けれども以前よりもずいぶん頭が回るようになった気がします。
木坂組と抗争していたころは、ただ無条件に暴力を振り回すだけのどうしようもない人間だったのが、今や別人に変化したようにも思えます。
まず、私達の組織に所属するようという発想を持ったことと、大局観を見据える目、老練とした落ち着きを持っていた。
暴力馬鹿が桐山との闘いで現実を見据えることができるようになったのでしょう。なるほど、その片腕分程度の成長はしたようですね。
「――――調べたところ、代海と手を結んでいる企業の名の中になんとまあ、世界の戦争の油注ぎ役、“キリング・ワイス”があったんですよ。
彼らと手を組んだ桐山は、ハワイ経由でチンピラを雇い、そして大々的に販売を行った。
それに釣られて見事高山を取引に引きずり出すことに成功しました」
「悪かったな！」
高山が八つ当たり的に私に噛みつきます。気持ちはわかりますが、事実は事実です。しっかり受け止めてください。
「そして赤色の偽軍服着込んだ中国のチンピラを倉峰君が抹殺してくれれば仕込み完了です。荒海、情報元分かりましたか？」
「情報元の情報屋を締め上げたらでてきたぜ
もうすでに夜逃げの準備は万端だったようだが、いかんせん気付かれるのが早すぎたみたいだな。海外への逃亡手段と1年は暮せる金をやるからこの情報をたたき売りして来いと黒スーツ着こんだオッサンが言ってたみたいだ」
「これで確信しました。
――――桐山の狙いは、大阪の疲弊と自身の大儲けでしょう。
中国の連中をもしあの時血祭りにあげていれば、確実に我々と小爺龍との抗争になったでしょう。
――――その時に我々が大規模な武器取引を行ったと知れば危機感を募らせるでしょうが面子は守らねばなりません。どうしても戦争

に持っていくしかないでしょう。
――――その時が本番です。桐山が小爺龍に武器取引を持ちかけるのは」
「――――まさか」
「そう。中国は武器取引のしにくい場所です。自国の武器企業はほとんど国の庇護のもとにいますし、監視の強さも日本の比ではありません。ましてやあそこは政府直属の連中が子飼いにいますから。抗争は蛇蝎の如く嫌うでしょうね。国営の武器企業に堂々と買いに行くわけにも行けませんし、喉から手が出るほど奴等は武器を欲しがるでしょう。武器が手に入らないであえいでいるマフィアに天使の手をくれてやるわけです。定価の何倍もの吹っかけ価格で」
「だが、そこまで短絡的に抗争はしないだろう。たかだか外で拾った飲んだくれが殺された如き、天安門の哀れな連中ほども気にも留めやしないだろう。」
「元々木坂組は、関西に進出してきた中国人の締め出しを一番きつく行っていた組です。締め出したリストの中に小爺龍の名も挙がっていました。そもそもお互い、トリガーの引きかけ状態だったんです。そして我々から先にトリガーを引くように仕向けられた」
「なるほど――――――――――――――――じゃあ、万々歳じゃないの？結局拿捕だけで済んだんだし」
「そうはいってはいられませんよ。そもそも桐山が動き出した時点でどれだけの損失が加わるか分かったもんじゃありません。
――――こちらも動きます」
「英国紳士淑女との会合という名の決闘の前にか？冗談じゃねえぞ」
そう倉峰君がゴチます。まあ、そうでしょう
――――ですが。
「いえ倉峰君。もしかしたらその案件も同時に解決するかもしれませんよ」
「はい？」
「――――――――――――――――――――――――――――――“渡り

鳥”からの情報です」
「――――はぁ！」
倉峰君と高山君の両方が同時に声を張り上げました。
荒海君が訝しげに首をかしげます。
「――――――――――――――――――“渡り鳥”？誰だそいつは」
その答えは私が答えるよりも前に、高山が声を荒げて話します。
「見つけるのにまず費用が1億ドルかかるって噂の伝説の情報屋だ。世界各地で頻出しては情報をもたらしている凶悪な化けもん。
――――俺も電話でしかお目に掛かれていない。おい、どうやって連絡つけた？」
「公表はできませんが、大阪の企業トップの方々はビルゲイツもビックリの億万長者ですから。日本が独占していた商品の価格がどんどん上がっていますからね。税率も甘くしましたし、そういう人たちの協力の元ですよ。知事も捨てたものではありません」
「――――――――――――――――――――――――――――あんた案外ラズウェルの解決なんて望んじゃいないだろう」
「――――いえ望んでいますよ。大阪は私の最終目標の地盤です」
さて、と私は話を区切ります。これ以上の言及は避けねばなりません。
「その情報によると――――代海蓮華があの事件前にイギリス高官と会合していたらしいのです」
「――――――――――――――――――――――――――――――！なっ！」
「おいおい――――――――――――――――――――――――――――」
それが何を意味するか。
提携を求めてきたイギリスが大阪を裏切ったか、そもそも最初から大阪の利権を奪うためだけに近づいたのか。
「あまりにも節操がありませんよね。天下のイギリス大帝国さんも。
――――これに合わせて、何だか気になりませんか？倉峰君と決闘

を行うそのアトラス家――――伝承と合わせて生き残っているんですよねーーーーそれなら信憑性がありそうですね」
「何がいいたい」
「――――あながち、異能の力で吸血鬼を滅ぼしたというのもそこそこ信じられるかもしれないということです」
「おいおい。ヤクでもキメたか？頭の所在地は大丈夫？このままだと銀河の果ての宇宙の真理まで見ちまうぞ？なあおい車谷」
荒海が本当に心配そうに覗き込んでくる。
――――――――――――――――――――――――――――――――失礼な。
木坂組はヤクをやっても売ってもいない。
「――――私もそう思いたいのですがね。身近の所に例があるとどうしても――――――――――――――――――――――――――――ね」
「あっ、お前まさか――――――――――――――――――――――――――――」倉峰君は気づいてくれました。そうなのです。
「そうです。もしかしたら“賀北会”の事件前にもう既にあのアトラス家によって“不浄人”の技術が確立されていたのかもしれないのです」

目録１（後書き）

まだ続きます。今後ともよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2845z/

sky blood 目録１

2011年12月10日00時54分発行